民話から探る「山の世界」

―下呂市萩原町の事例から―

山々に囲まれた下呂市萩原町

岐阜県立益田清風高等学校　地域研究

民話から探る「山の世界」―下呂市萩原町の事例から―

岐阜県立益田清風高等学校　地域研究

はじめに

私たちの高校がある下呂市はぐるりとどこを見ても山です。「こんな町、山しかないやん…。」

そうです。ここ岐阜県下呂市は町の 92.0%が森林なのです（参照：下呂市 HP)。今年は「山の日」が制定され、前より山への注目も少しは上がるかなと思っています。ですが実際、地元の人はそこまで山というものに興味を持ったり、意識をしたりすることはありません。

授業などで「山のイメージ」についてみんなで意見を出し合っても…

・山は、とても地味で何もなくて、「田舎」というイメージを持っています。道もほとんどないし、虫が多いし、じめじめしていてあまり好きではないです。

・山のイメージは、ただたくさん木の生えたところ、熊や鹿の暮らす場所で人間からは遠い場所だと思います。

・「ただ木が生えている場所」という感じです。身近に山があっても味気のないつまらないところだから、山なんか削っていって、そこにでっかいショッピングモールを建てちゃえばいいのにとも思ってしまいます。

「山なんて何もない」なんて、みんな声をそろえて言います。

そんななか、授業で高校がある下呂市萩原町の山について勉強しましたが、自分たちが目の前に見える山の名前すら知らないことに驚きました。また、いくつかの山には、興味深い民話が伝わっていることも学びました。山のことを少しずつ知っていくと、身近にある山のことを私たちはどれだけ知っているだろうか、また、本当に「山なんて何もない」のだろうかという疑問がわいてきました。そして、「実際に山に行ってみたい」という気持ちが強くなりました。

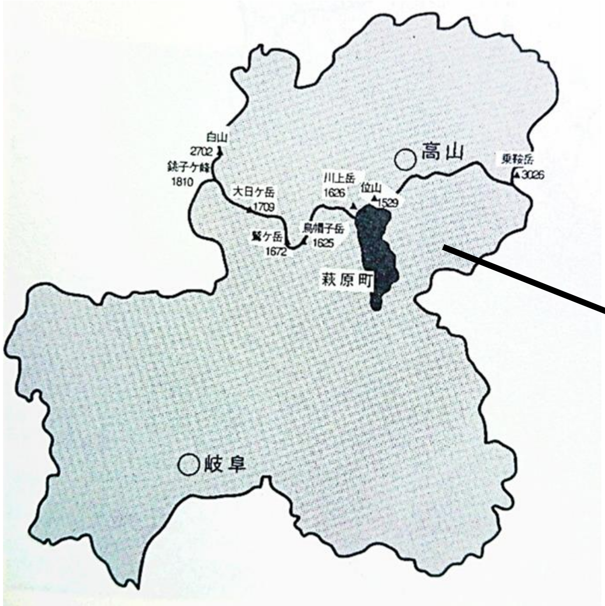
そこで本研究では、下呂市萩原町の山々に伝わる民話の研究を通じて、私たちがまだ知らない「山の世界」をのぞいてみることにしました。研究方法としては、まずは、興味深い民話が残っている萩原町の山に関する資料をグループで分担して調査しました。その後、夏休みに民話の舞台となった山々に実際に訪れるとともに、民話に関係する地域の方々へ聞き取り調査を行いました。そして、最後に研究を通じて、みえてきた萩原の民話の特徴や「山の世界」について考えたことをまとめました。

【教室からの眺め】

【図書館で地形図を見る】

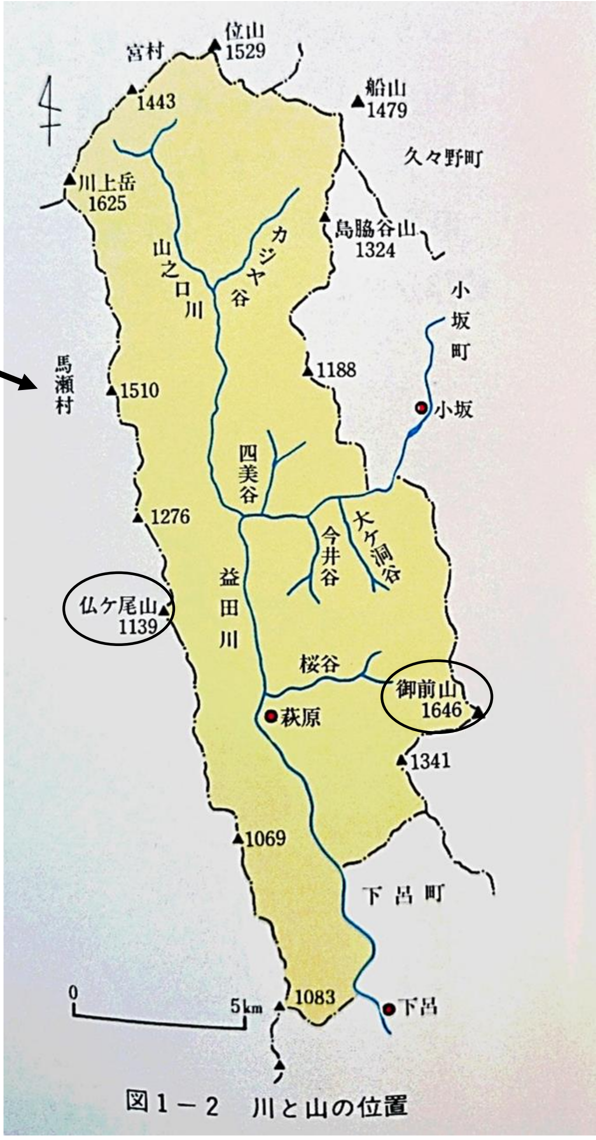
第１章　萩原町の山々

私たちが学ぶ益田清風高校がある萩原町は、岐阜県のほぼ真ん中にあります。町は、南北に細長くのびて長方形に近い形をしています。町の周りには 1000mを越える山々がそびえ、町の中央には飛騨川（益田川）が流れています。戦国時代には、飛騨の豪族三木氏が本拠地とするなど、古くから南飛騨の政治・経済の中心として栄えてきました。平成 16 年（2004）、下呂町、小坂町、馬瀬村、金山町と合併して、下呂市となりました。



【萩原町の位置】

【南北に走る２本の稜線に挟まれた萩原】



【萩原町を囲む山々】

萩原町には、御前山（1,646m）、川上岳（1,626m）の二峰を頂点として、数多くの山々が連峰を形成しています。独立した山はほとんどなく、山と山は尾根で続き、稜線をつくっていることが分かります。細長い長方形をした萩原の地形は南北に走る２本の直線状の稜線（写真参照）によってできています。

私たちが調査したところ、萩原の山々のうち、西の仏ヶ尾山、東の御前山には興味深い民話が残っていることが分かりました。そこで、本研究ではこの２つの山に関わる民話を調査・分析していくことにしました。なお、次章以降の参考のため、萩原の地区名をのせておきます。

【萩原町の地区名】

飛騨川左岸

・宮田
・大ヶ洞
・奥田洞
・上上呂
・下上呂
・桜洞
・萩原上
・萩原中
・萩原下
・上村
・花池
・中呂

山之口川流域

・山之口
・尾崎一
・尾崎二

飛騨川右岸

・四美
・尾崎三
・野上
・羽根
・古関
・跡津
・西上田

以上、本章は『萩原町史第一巻』、『はぎわら文庫６　萩原の風土と生き物』を参照しました。

第２章　仏ヶ尾山に関する民話の調査・考察　その１

第１節　仏ヶ尾山について

仏ヶ尾山は、標高 1139.4m、川上山脈中にあって、萩原町野上と馬瀬村の境界である。古くから雨乞いに霊験あらたかな山として崇拝されてきた。頂上直下に「穴岩」とよぶ巨石があって、干ばつに悩んだ里人がこの岩に詣で、雨乞いの祈願をする慣わしがあった。仏ヶ尾の尾根づたいにある鞍部が連坂峠、後に古関の日和田峠が整備されるまでこの峠は、馬瀬村や郡上方面に通ずる重要な道筋であり、「上留駅」が置かれて、古くから交通の要衝であった尾崎・上呂橋場と結んで、人馬の往来が多い峠道だった。

（参考資料『萩原町史　第一巻』）

【お美津稲荷から見た仏ヶ尾山】

第２節　仏ヶ尾山の民話「ほとけ山の由来」

むかし、江戸時代のことやというが、野上に彦七と言う百姓が住んでおった。百姓とはいうものの、何よりじまんは、ドカンととくいの鉄砲で、鳥やけものを打つことやったそうな。

ある秋のこと。

鉄砲かついでⒶ<u>黒谷へ出かけた</u>んやが、その日にかぎってウサギいっぴき見あたらん。

「いったい今日はどういうこっちゃ。おかしな日もあるんよ。」

彦七はぶつぶつひとりごとを言いながら、谷をどんどんのぼっていくうちに、いつのまにやら頂上へでてしまったと。そこは、今までの暗い谷あいから、いちどにぱっと夜が明けたように、さんさんと日光がふりそそいでおった。

―――　こりゃ、えらいとこまで来てしまったぞ…。

Ⓑ<u>見わたすかぎり山はだは秋を装い、萩の花さく里のあたりまで絵まきのようにひろがって、夢みるような眺めやったと。うっとり山の景色を見わたいておるうちに、ふと手前に高くそびえたつ、大きな岩のてんずちに目をやった</u>。

と、そこには美しい長い尾羽根をピンとのばした一羽のヤマドリが、静かに彦七を見つめるようにしておるではないか。

―――　おお、しめた！やっぱりここまできてよかったわい…。

思わぬえものに心をおどらせ、鉄砲を手にねらいさだめて引きがねを引いた。

ダダーン…。

山やまにこだまする銃声とともに、ヤマドリは岩の上から彦七の前を、ザザッと谷間へ落ちていった。

―――　よし！

彦七はえものを追ってかけくだり、ここぞと目ざしたあたりの落ち葉をかき分けたとたん、
―――　や、や！
彦七の顔はみるみるまっさおになり、ぼんやりその場に立ちつくしてしまったとよ。
―――　こりゃ、どうしたことじゃろ…。
　彦七の前にあらわれたのは、ヤマドリではなかった…。なんと、五寸（約 15cm）ばかりの、みごとな木ぼりの「あみだ如来」やったと。あまりのことに彦七は声もなく、
―――　ああ、もったいなや！
と、たましいを失ったようにぼっそり家に帰ったが、家のものにも声はかけず、そのままふとんにもぐり込んでしまったそうな。
その夜…。彦七はふしぎな夢をみた。あたりにかがやく光とともに、ほとけさまがお出ましになって、
「われを連れてまいれよ。」
と、おごそかに告げられたとよ。
彦七は、ハッと目をさまいたが、もうその姿はなかったと…そして次に日も、またその次の日も、つづけて同じ夢をみた。
ⓒ彦七は、とうとう思いあまって、あの黒谷の深い山にわけ入って、「あみだ如来」を大切におしいだいて帰り、仏だんにおまつりしたそうな。
　それ以来、あれほど大好きな鉄砲うちもぷっつり止めて、毎日毎晩、如来さまにおまいりするのが彦七の生きがいとなり、田やはたけの作物が毎年のようによう実ったという。このことがあってから、村人はあの尾根を『ほとけ山』とよんで、彦七のむかし語りを伝えておる。

（参考資料：『はぎわら文庫１　萩原のむかし話』）

第３節　現地調査・考察　その１

１：現地調査　仏ヶ尾山登山（７月２４日〈日〉）

　仏ヶ尾山への登り口は、萩原野上口と連坂峠頂上口の二つがありました。

【仏ヶ尾山の由来が書かれた登山道案内図】

【野上登山口にて経路を確認】

今回は、萩原野上口から登山をし、山の中腹にある穴岩を目指すことにしました。登り口のすぐ裏手に「黒谷」と書かれた看板を見つけました。民話のなかで彦七が猟に出かけた「黒谷」（下線部Ⓐ）はこのあたりだと考えられます。

主人公の彦七は、このあたりから獲物を求めて、山を登っていったのだろうと思いました。

私たちも民話の主人公彦七になったつもりで山を登っていきました。登っているとき、昔このあたりで不思議な出来事が起きたと思うと、体はかなりきつかったですが、心は、わくわくしてきました。

【「黒谷」、発見！】

２時間ほど登るとようやく「穴岩」に到着しました。このあたりは、眺めがよく、萩原の町がよく見えました。「萩原」という町の名前も、昔、原っぱに萩の花が咲いていたことに由来するといいます。彦七も私たちと同じ景色をみたのでしょうか（下線部Ⓑ）。また、彦七は大きな岩の「てんずち」（頂上）にヤマドリを見つけましたが、この岩は「穴岩」だろうか、とも思いました。

【「穴岩」からの眺め】

【「穴岩」とても大きい！！】

その後、私たちは、穴岩付近を調査（「穴岩の雨乞い」参照）し、野上登山口に戻りました。

２：現地調査後の考察

現地調査では、仏ヶ尾山で約４時間を過ごしました。山の中を歩いていると、感覚が研ぎ澄まされていくように感じました。特に普段は感じることのない生き物の気配が山には濃厚にしていました。私たち人間と他の動物たちとの距離が近くなった気がしました。また、登山の途中で急に風が吹いて、木の葉が揺れたり、岩と岩との間から冷風が吹き上げてきたりすると、何か得体のしれないものがそこにいるような恐怖も感じました。

彦七は民話の中で、阿弥陀如来に出会って動物を殺すこと＝猟をやめました。私たちの住む萩原町には、他にも動物を慈しむ話が伝わっています。文化 5 年（1808）に、萩原一帯に大雪が降り、朝から夕方にかけて降り積もった雪は 2 メートルにも達しました。その雪のせいで、山にいた猪や鹿などの獣が飢えたりなどして大量に死んでしまい、その数千数百頭にものぼったといいます。野山に死体が多数散らばっており、あまりにも痛ましいということで、村人たちは供養塚を建立しました。現在、萩原町上呂にある「鹿供養塚」がそれにあたるといいます。私たちの町の先祖は、生き物を慈しむ気持ちを持っていたことが分かりました。

【仏ヶ尾山の登山道、生き物の気配を感じる】

【萩原町上呂にある鹿の供養塔】

第４節　現地調査・考察　その２

１：高橋先生宅（８月３１日〈水〉）

「仏ヶ尾山の由来」という民話に登場した阿弥陀如来像について、地元のことに詳しい本校の熊﨑先生に質問してみました。すると、「今も阿弥陀如来は野上地区の家にあるみたい。そして、それは高橋先生（本校の先生）のお家だよ。」という情報を教えていただきました。私たちは、高橋先生にお頼みして、ご自宅に伺い、阿弥陀如来像を見せてもらいました。また、高橋先生の義理のお父さんである高橋利雄さんから、阿弥陀如来像に関わるお話と「ほとけ山の由来」の民話のストーリーの原形となったと思われる巻き物について説明を受けました。

◎「彦七」の子孫、高橋利雄さんへの取材

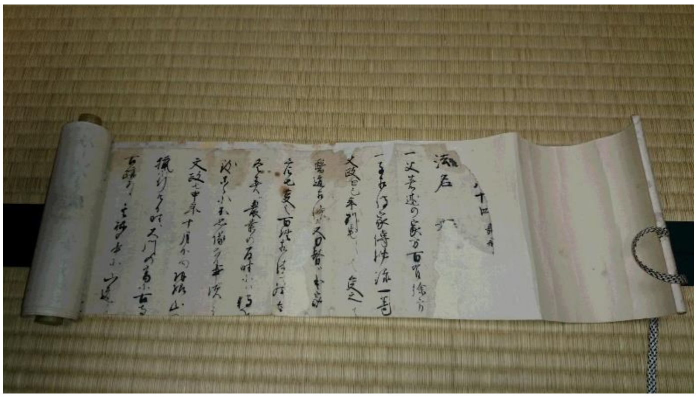
・仏様と一緒に「古文書」(巻き物になっている）が伝わっている。巻き物が作られたのは、慶応元年（1865）のことで、高橋家の先祖、高橋正慶さんによって書かれたものである。ここに「彦七」や「阿弥陀如来像」の話が出てくる。
・高橋家の本家が彦七の家で、彦七は春から秋までは農業をして、冬場は狩猟をしていた。
・文政７年（1824）十月下旬、羽根地区（野上地区の南）の大門という古寺のあった場所の近くの林道の道脇で木造の仏様を見つけた。毎夜、夢に出てくるので拾いに行った。
・彦七は猟をする（動物を殺す）ので、自分は汚れていると思い、弟に仏像を渡した。この次男の家が高橋さんの家である。

【高橋さんから話を聞く】

【阿弥陀如来像】

２：現地調査後の考察

高橋さんのお宅では阿弥陀如来像を実際に見せてもらい、家に保管されていた彦七の弟、正應が実際に書き留めた慶応元年（1865）の巻き物を見せてもらいました。私たちがその場で読めるものではないですが、翻訳されたものを読んだり、高橋さんの話を聞いたりして、書かれた内容を少しずつ理解することができました。その結果、「ほとけ山の由来」の民話がこの巻き物に貼られた古文書の話から生まれたこと、この話が生まれるきっかけとなった出来事が文政７年（1824）に起こったこと、ヤマドリを打ったら仏様だったという話は後々付け加えられた話だったことが分かりました。高橋さんから、私たちが最初に読んだ話は少し違っていると言われたときは驚きました。また、民話に沿った話だけでなく、家に山伏が訪れてきて「この家に目と足が悪いものはおらんか？」と言われたことがあったそうです。その時、阿弥陀如来の目と足には傷があった、という話もお聞きしました。阿弥陀如来像に関わる高橋さんの不思議なお話を聞き、この民話はただの昔話ではなく、今でも実際に語り継がれているのだと知りました。



【民話のもととなった古文書！！】

【高橋さんのお宅からは仏ヶ尾山が見えました。】

第３章　仏ヶ尾山に関する民話の調査・考察　その２

第１節　仏ヶ尾山の民話「穴岩の雨乞い」

古老によると、「区長さんの触れで、一軒に一人ずつ出たが、まず白王神社に集まってお祈りをしてから、羽根境の山の尾根を、ドンドン太鼓をたたいたり、ブーブーと竹ぼら（竹の笛）を吹き鳴らいては、登っていったもんや。尾根づたいの八合目あたり、白谷ザコの頂上にⒶ“穴岩”とか“雨岩”とか呼ぶ、十メートル四方もある、でっかい岩があるが、下のほうに、えぐったような大きな洞穴があってな。ここから、加賀（石川県）の白山さまへ通じているとか、いや竜宮まで行けるとか、穴のなかの暗やみには恐ろしい怪物（山姥）が住んでおる、なんていわれたけんど」とあります。また、古老はその山姥について、「あれは大女のどえらい力持ちで、お産のうぶゆ湯に益田川の水を使おうとして、あの穴岩に左足をかけ右足は瀬の上の大岩を踏んで、ザブザブと汲みあげた、ってことでな。　その怪物を怒らせると大雨が降るというので、生木を切っては火をもやし、煙を穴の中へ入れてやった」ということです。これがまず、雨乞い行事の手はじめというところです。

それが終わって、仏ヶ尾山の屋根をさらに登ると、Ⓑ頂上に三角点があり、そこを少し下がったところに、Ⓒ「白山大神・御嶽大神」と刻んだ石碑と、丸柱の鳥居とが立っています。

山頂では、東の御嶽と西の白山とが一直線に眺められ、ここは羽根との共同山ともなっていて、石碑は羽根区の御嶽講の人びとによって建てられたものだとのことでした。この碑のところで、いよいよ“雨乞い”の祈りがはじまります。まず周りの草をきれいに刈って清め、石碑にお神酒を供えると、はるかに御嶽・白山の両神に祈願するのです。

古老によると、「お祈りがすむとオミクジを引いたが、まず、用意してきた白紙を小さく切って、一枚ごとに、一から十までの数字を書き入れ、それを丸めて、地面にばらまいておく。その上を焚き火であぶった杉葉でなでると、紙がパッと飛びついてくるでな。それを開いて、出てくる数字により、雨の降る日が決まるというわけや。けど、気に入らん数字が出たりすると、“祈りようが悪い、もう一ぺんやり直し”なんて、都合のええ日があらわれるまで、なんべんも引いたりしたもんや」と笑っていました。

それが終わると、二百メートルほど降りたところに、年じゅう水が涸れないという水飲み場があって、それを飲んで里に戻り、Ⓓいただいたオミクジを白王神社に祭って祈願すると、あとは雨を待つばかりということになります。

土地の人たちは、「いまでも、あの穴岩あたりで、大声に叫ぶと、不思議に雨が降るっていうし、にわかに雨が降りだいたようなとき、“だれか山へ行っとるな”ってうわさすると、やっぱり登っておるらしい」と不審な顔をしていました。「仏ヶ尾山」は、なんとも奇妙な山です。

（参考資料：『はぎわら文庫１５　萩原の伝承めぐり』）

第２節　現地調査・考察

１：仏ヶ尾山登山（７月２４日〈日〉・８月５日〈金〉）

①「穴岩」（下線部Ⓐ）

穴岩は話に出てくるようにかなり巨大な岩でした。（第２章第３節の写真参照）近くに看板が立てられていましたが、文字はかすれて読めませんでした。大きな洞穴を探したところ、岩の南側の下の方にそれらしきものを発見しました。この穴が白山や竜宮城に通じる、または山姥が住んでいる穴かと思うと興奮しました。また、洞穴の近くには、萩原町にあるお美津稲荷のお守り（鈴）が備えてあって、地域の人たちの信仰心を感じました。

【「穴岩」の洞穴か（岩の南側）】

【岩の北側にも穴が・・・】

②「仏ヶ尾山の頂上」（下線部Ⓑ）

７月２４日（日）の現地調査では行けなかった頂上の調査を８月５日（金）に行いました。頂上からは西に御嶽山、東に白山を見られるそうですが、この日は雲が多く、２つの山は見えませんでした。しかし、南飛騨で最高峰である御前山を目の前に眺めることができました。

【仏ヶ尾山、頂上】

【仏ヶ尾山頂上から見る御前山】

③「石碑と鳥居」（下線部Ⓒ）

頂上から少し下った場所に石碑と鳥居がありました。石碑には民話にあるように「白山大神・御嶽大神」と刻んであって、その左側に「明治二十五年十一月十日　川西村中」と書かれていて、明治25年（1892）にこの石碑が「川西村中」（現在の羽根村）によって建てられたことが分かりました。

【丸柱の鳥居の前】

【石碑が建てられたのは…】

④「白王神社」（下線部Ⓓ）

野上の登山口から南へ歩いて１０分ほどのところに白王神社がありました。白王神社は、明治 41 年（1908）に村にあった白山神社と八王子神社が合祀されたものだということです。神社の境内は広く、ここなら村人たちが集まって、雨乞いの祈願もできそうです。

【白山神社の前で】　　　　　　　　　　　　　　【境内は広かった！！】

２：現地調査後の考察

仏ヶ尾山に登ってみると、山頂に近づくにつれ、大きな岩がたくさんありました。そして、中には大きな穴があいているものもありました。私たちは、どうして昔の人たちは、あの岩だけを「穴岩」と呼び、このような民話が生まれたのか、疑問に思いました。現地調査の後で話し合ってみて、「穴岩」と他の岩との違いは、「穴岩」からのみ、萩原の里、つまり自分たちが住んでいる場所が一望できることにあると考えました（第２章第３節写真参照）。私たちの先祖にとって、この「穴岩」は雨を呼ぶ怪物や神様と里の町とをつなぐシンボルだったのではないでしょうか。

【仏ヶ尾山には巨石がたくさん】

次に、民話では、穴岩に住むとされる「山姥」を怒らせると雨が降るとされています。この山姥について、私たちの仲間の蒲くんは、「山の子」というイベントと関わりがあるのではないかと発表してくれました。蒲くんの住む下呂市金山町東地区では、「山の子」というイベントを行います。毎年１１月に小学校１年生から中学校３年生の男子が地区の家を廻って、お金をもらい、山に行って味ご飯を備えます。このイベントに女子が参加しないのは、山の神は女性で、女子が山に行くと嫉妬するからだといいます。昔から山の神は女性であったことが分かりました。

また、穴岩の穴が白山に通じていたり、山頂付近に白山大神が祭られていたりすることにも注目しました。調べてみると、白山が人びとに水をもたらす神として知られていることを知りました（参照：白山比咩神社 HP)。そんな白山が仏ヶ尾山の頂上から見えることがこうした信仰を生み出したと思われます。

なお、私たちの学校がある萩原町には白山神社は５ヵ所あり、学校の近くの上村白山神社に５月２５日（水）に授業で訪れたこともあります。神社の背後の山から流れてきた小川が境内を流れていて、水の神様といわれていることも納得しました。

【上村白山神社　学校から歩いて１５分】　　　　　　　　　　　　　　【調査中・・・】

第４章　御前山に関する民話の調査・分析　その１

第１節　御前山について

【仏ヶ尾山頂上からみた御前山】

標高 1,650m、萩原町の最高峰である御前山は、本町のほぼ中央東寄り、小坂町との境界に位置する。頂上からの眺望は雄大絶景であり、東に御嶽、北東に北アルプス、西に白山、南に美濃の諸峰を視野に入れることができる。織田信長が永禄 10 年（1567）、岐阜場入城に際し、鬼門除けのため観音像を頂上に安置したという伝説も残り、御前山は古くから南飛騨の名山として広く知られていた山である。この御前山に向かう尾根の途中に「天ヶ岩」がある。

（参考資料『萩原町史　第一巻』）

第２節　御前山の民話「天が岩の天狗」

桜洞の山と、上呂の山と、奥田洞の山が、三方からより集まった峰の頂上に、「天が岩」と言う大きな岩がある。むかし平家の落武者が軍用金をこの岩の近くに埋め、目じるしに白い花の咲くツツジの木を植えたと伝えられておる。

むかし、むかし。

この<u>Ⓐ「天が岩」の下に、天狗が岩屋を造って住んどったそうな。</u>

奥田洞の人たちは、「天が岩の天狗さま」と言って、こわがっておったと。別に、村びとたちに、危害を加えるわけでもないけど、なるだけ「天が岩」には、近づかんようにしとったげな。

ところが、この天狗さまはな、どえらい酒ずきでよ。春と秋の村祭りの太鼓が鳴りだすと、岩屋にじっとしとれんようになってしまうんや。

なんでやって、そりゃ祭りのご馳走や。酒の匂いが、ぷーんと風に乗って吹いてくるからよ。

――――こりゃたまらんわい、もう酒のかんがついたらしいぞ！

天狗さまは、のどぼとけをゴクン、ゴクンならせては、長い鼻をピコン、ピコンと振りまわさっさるんやと。そして、ヤツデの葉っぱのようなうちわを、パタッ、パタッとあおいで、祭りの準備でおおいそがしの奥田洞の家々へすうっととんでいかっさるのよ。

奥田洞の家々では、びゅーんと風が吹いたかなと思うと、じっさまやばばさまは、

「ほれ、ほれ！天狗さまが、酒飲んでいかんさったわい。」

と言っては、一升とっくりを振ってみるんやと。すると、どうやな。一升（1.8ℓ）はいっとったトックリが、八合（1.44ℓ）ぐらいに減っとるんやと。村中一軒のこらず、二合ぐらいずつ飲んでいかさったってことや。

ほんとに、天が岩の天狗さまは酒ずきやったんやなぁ。

御岳に雪が白う輝きだいた秋の夕暮どきのこっちゃ。
「秋祭りもすんでまったし、春祭りまでは、まんだ日あいがある。」
「ああ！酒が飲みとうなったわい。」
天狗さまは岩屋の中で、独り言をいっておいでたと。天狗さまは、冬になって雪にうずまった岩屋の中で飲む酒を買いだめておかんならん―――と気がついた。
「そうじゃ。これからいって、酒かってこ。」
Ⓑ山をくだり桜洞を通って、萩原へ酒買いに行くことにきめた。
―――おう寒い。今年は雪が早いぞ…。
天狗さまは、長うて赤い鼻の頭をぐぎっぐぎっとこすってよ。まっ白な風呂敷で、ほうかぶりをしたんやが、やっぱり長うて高うて、赤い鼻だけはピコッととびだいて、とってもおかしなかっこうやったげな。
「どりゃ。ひとっぱしり、いってくるか。」
天狗さまは、「天が岩」の上に登って、ヤツデの葉っぱのようなウチワで、パタッ、パタッと、あおがさったと。すると、どうじゃ…。どっかから、風がぴゅーと吹いてきてよ、天狗さまは空をとんで、萩原の方へまいおりていかさったとよ。
さあてと、天狗さまが酒買いに持っていかさった入れ物は、なんだか、わかるかな。
それがまたおかしなことに、酒ダルではのうて、首にかける頭陀袋そっくりの、布の袋を持っていかさったんや。Ⓑ酒屋の店先につくと、天狗さまは、
「へえ、こんにちは。酒うっとくれ。」
まるでわれ鐘の鳴るような大声で呼ばさったと。びっくりした主人が出てみて、また、腰をぬかさんばかりやったとよ…。そりゃ、そうや。白い風呂敷でほうかぶりした大男が、まっ赤な赤い鼻を、ピコピコさせて、どでんと立っておるんやがな。
「はい、こんにちは。なんじゃったいな。」
酒屋の主人はぶるぶるふるえて、天狗さまを見とったげな。
「この袋に、酒を四斗（約 72ℓ）入れてくりょ。」
頭陀袋を見て酒屋の店主は、またまた、びっくらこいてまったのよ。
「あほらしいこっちゃ、こんな袋に、酒なんか、入らんぜえな。もってまうがな。」
「いんにゃ。そんなこと言わんと、入れてみてくりょ。」
主人は酒がもってまうにきまっとると思ったけど、天狗さまのかっこうにおそろしゅうなって、四斗ダルから酒を、トクットクッと、袋の中へ流しこんだと。
こりゃ、こりゃ！またどうしたこっちゃ。縦横一尺五寸（約 45 ㎝）幅三寸（約 9 ㎝）ほどの袋の中に、四斗ダルの酒がよ、一滴のこらず、入ってまったんやがな。酒屋の主人はなにがなんやら、わけがわからんようになってまって、へなへなと土間に座りこんでまったとよ。
天狗さまは、代金を酒だるの上にジャラジャラとおいてな、酒が四斗も入った頭陀袋を、ひょいと首にかけると風のように出ていかさったと。
酒屋の主人は、夢でも見ているのではないかと、目をぱちくりさせて外にとび出てみたそうな。
と、どえらい砂煙がぱあっとあがってよ、枯れ葉が板屋根の上にまいあがり、天狗の姿は夕焼空に消えていってしまったということや。

（参考資料：『はぎわら文庫１　萩原のむかし話』）

第３節　現地調査・考察

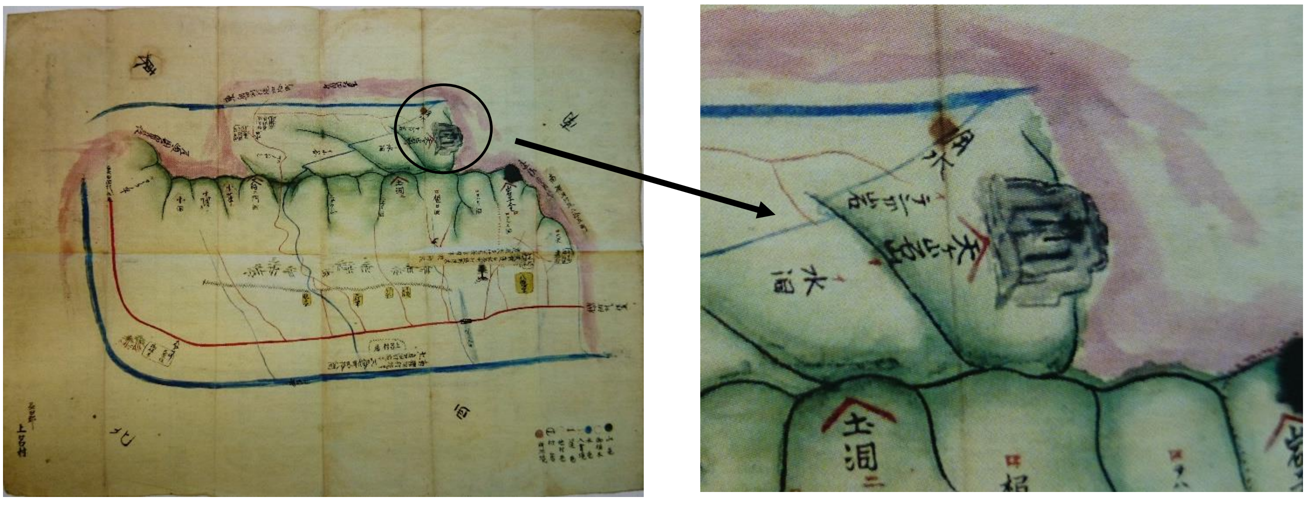
①「天ヶ岩」（下線部Ⓐ）

天ヶ岩登山口へは、国道４１号線から奥田洞の集落へのびる道を進んでいきました。途中で、道がアスファルトから砂利や石が散乱する荒れた道となり、車に乗せてもらっていても少し怖かったです。林道の終点に広場があり、「天ヶ岩の由来」と天ヶ岩までのルートが書いてある看板を見つけました。その後、登山口を探しましたが、新しく林道も作られていて、どこが登山口かよく分かりませんでした。結局、この日は天気も悪く、雨も降りだしそうだったので、天ヶ岩まで行くことはできませんでした。行ってみた感想は、天ヶ岩までの道がもう少し整備されていれば良いし、登山口も分かりやすく表示してほしいと思いました。そうすれば、天ヶ岩に登ろうと思う人も多くなるのではないかと思います。

【この後、道が荒れてきた・・・】

【天ヶ岩の由来が書かれた看板】

また、授業で先生に天保 15 年（1844）「益田郡上呂村御林山巨細絵図面」（下の写真）に天ヶ岩が描かれていることを教えてもらいました。この資料から少なくとも江戸時代後期には、御前山の尾根にあった巨石が「天ヶ岩」と呼ばれていたことが分かります。また、絵図では、天ヶ岩は、奥田洞村と他村との境界線（「耕地境」、紫色で書かれた線）のすぐ北側に描かれており、境界の目印として機能していたのではないかと思います。



【益田郡上呂村御林山巨細絵図面】　　　　　　　　　　　【天ヶ岩が描かれていた！】

（参考資料：「幕領飛騨の御留山と植木場」）

②天狗様が酒を買いに行った萩原の「酒屋」？？（下線部Ⓑ）

民話のなかで天ヶ岩の天狗様は、萩原の町の酒屋にお酒を買いにきます。私たちはこの酒屋は、学校の坂の下にある老舗の酒屋さん「天領」ではないかと考え、調査してみることにしました。

◎天領酒造・奥田さんへの取材（７月２６日〈火〉）

・天領酒造の創業は、延宝八年（1680）で、今から336年前の江戸時代の中ごろだそうです。

・元々、先祖の人は滋賀県に住んでいましたが、萩原の気候が気に入り、移住されたそうです。

・地元の諏訪神社の春と秋のお祭りには、氏子としてお酒を奉納するといいます。

・民話の中で酒屋の主人が天狗に注いだ酒が入っていた「四斗樽」について質問すると、実際に見学させてもらうことができました。

【萩原の老舗「天領酒造」】

・奥田さんからは「天が岩の天狗の話は初めて聞いた。近くにある「天狗」という肉屋さんに聞いてみたらどうか」というアドバイスもいただきました。

・取材している途中で、ふすまを開けて小さな男の子がいましたが、天領酒造の 10 代目だといいます。次はこの子に「天領」は受け継がれていくのだなと感じました。

【「天領酒造」でのインタビュー】

【天狗様が飲んだ「四斗樽」？？】

◎肉の天狗・戸谷さんへの取材（７月２６日〈火〉）

・天狗を創業したのは、戸谷さんの父の代で昭和 28 年（1953）だという。天狗の名前は、先代の父が修行していた高山のお店「天狗」から、のれん分けしてもらったことに由来するそうだ。

・店内には、天狗のお面が飾ってあった。聞いてみると店名にちなんで買い求めたという。

・天ヶ岩の天狗について知ってますかと質問したら、天

ヶ岩については聞いたことがあるが、天狗が住んでいたという民話ははじめて知ったという。

【萩原町店街にある「天狗」】

【肉の「天狗」でインタビュー】

【天狗のお面が！？】

第４節　現地調査後の考察

天狗は昔から深い山の中に住んでいるといわれています。人里で起きた不思議な出来事を、人びとは天狗の仕業と考えることもよくあったそうです。また、山の中で修行をする「山伏」とも深いつながりがあるといいます。現地調査で向かった天ヶ岩は、萩原町北部の奥田洞の奥深い山の中にあり、今でも里の人たちはあまり近づきません。また、萩原には次章で扱う中呂の山之坊などで、山の中で仏教の修行を行う人たちが存在していました。こうした萩原の地理的な環境が、萩原の民話の中に天狗を登場させたのではないかと思います。例えば、同じ萩原町の南隣の下呂市下呂町には、「釜ヶ野の天狗」という民話が伝わっています。この民話で、天狗は自分のひげを使って、村人の寿命をのばします。「天ヶ岩の天狗」も「釜ヶ野の天狗」も不思議な力を持っている点が共通しています。

第５章　御前山に関する民話の調査・分析　その２

第１節　山之坊について

萩原町中呂の現在、龍澤山禅昌寺がある集落から東北方およそ２ｋｍ余りの山道を巡ったところの山林中にその昔、霊方山真福寺という寺があった。現在は俗称「山之坊」といわれて多少の耕地のある空開地で、禅昌寺の控地になっている。江戸時代、元禄検地の頃には、わずかに２間半に２間の薬師堂一宇を残すのみで荒れはてていたようであった。現在、御前山登山道の一つに、中呂山之坊コースがある。

（参考資料：『萩原町史　第１巻』）

【禅昌寺から山之坊方面】

第２節　御前山の民話「山之坊の蚕薬師」

Ⓐ中呂の禅昌寺境内に、円通閣（観音堂）というお堂があり、向かって右脇には、薬師如来像がまつ

られています。この仏像は、その昔、中呂の里から二キロばかり東の山の中にあった、霊方山真福寺（伝開基・山安海岳上人)、いわゆる“山之坊”に安置されていたと伝えられるものです。

その薬師如来の体内に埋め込まれているという、一寸八分（約５．４㎝）の小さな“薬師仏”についてお爺さんは、『山之坊・蚕薬師仏略縁起』という古い文献を示し、「その仏さま様は、今からおよそ六百七十年の昔、南北朝の時代に後醍醐天皇が“念持仏”として、まつっておられたということでな。やがて戦国時代のころには、美濃の国加納の奉行のところに伝わっておったそうな。

ある夜のこと、二人の家来が、“薬師仏”から、“ここに近い飛騨の国は、昔から養蚕の盛んなところと聞いておる。わしはそこに言って蚕を守り、人々に幸せを与えよう”と、それぞれにまったく同じ“夢のお告げ”を受けたと。不思議に思った二人は、早速、薬師仏をつれまして飛騨に入り、国司の三木大和守直頼に“いわれ”を告げて贈ったという。直頼はこれを“蚕養薬師”と名づけ、山之坊の真福寺にまつることとし、新たに二尺一寸（約 63cm）の薬師如来像を作らせ、胎内に、その“仏さま”を納めた…と記されている」とその由来を語っています。

Ⓑ山之坊の“真福寺”は今では跡かたもありませんが、胎内に“蚕薬師”を納めたという薬師如来は、禅昌寺の円通閣に移され、安置されているのです。

（参考資料 :『はぎわら文庫１２　萩原の民俗信仰と芸能』)

第３節　現地調査・考察

①「禅昌寺円通閣」（下線部Ⓐ）

◎禅昌寺・大前さんへの取材（８月５日〈金〉）

・山之坊は、禅昌寺から北に歩いて２０分ほど離れた山の中にある。
・「坊」という名前は、僧たちが修行する建物をさす。
・１５年前までは人が住んでおり、周りに畑もあった。町から離れて、自然の中で暮らすことで、より修行に集中できた。
・今は誰も住んでおらず、建物も残っていない。

【禅昌寺の境内にある「円通閣」】　　　　　　　　　　　　【胎内に「蚕薬師」を納めた薬師如来】

②「山之坊・真福寺」（下線部Ⓑ）

山之坊の手がかりを得るために、下呂市ふるさと記念館を訪れ、学芸員の田中さんにお話を伺いました。田中さんからは、山之坊が描かれた江戸時代の古地図「中呂村絵図」・「安永２年（1773）中呂村耕地絵図」について詳しく解説をしていただきました。

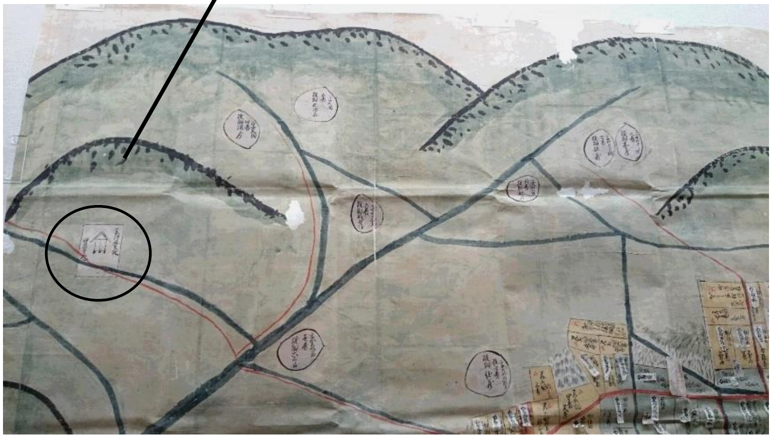
◎下呂市ふるさと記念館・田中さんへの取材（８月１７日〈水〉）

- 絵図の中には、山の中にあった山之坊や白山神社など中呂にあった神社や寺などの宗教施設が描かれている。また、谷（神楽谷）や洞、岩（どんびき岩、「どんびき」はカエルを意味する、カエルに形が似ている岩らしい）の名前までが細かく描かれていることが興味深い。
- 絵図の製作過程から江戸時代の人びとが山に大きな関心をもっていたことが分かる。それは、草や柴（小枝）などを肥料や燃料として使う必要があったためだと思われる。
- 村と村との境界が非常に重視されていたことが分かる。例えば、この絵図では中呂村と東上田村との境界として「梨の木」が目印とされていたことが分かる。山の中の巨石にもそのような境界の目印としての役割があったと考えられる。

【学芸員田中さんに解説していただきました。】

【「薬師堂地・禅昌寺抱」と読めた！】

【安永２年中呂村耕地絵図。でかい！！】



第４節　現地調査後の考察

南飛騨の山間部に位置し、水田に恵まれない萩原町は昔から、「蚕飼いどころ」といわれ、養蚕は一家の生計をまかなう重要な農事で、かけがえのない現金収入の手段だったといいます。農作物の耕作についてもそうですが、養蚕もそのときの運不運によって成功と失敗があり、また年どしの気候やめぐり合わせにも左右されることが多かったそうです。そこで、どこの農家でも養蚕に関わる神様を「蚕玉（こだま）さま」といって古くから伝えてきました。そうした地域的な背景から、当時この地域を勢力圏としていた戦国大名である三木良頼（1497？～1554）に蚕薬師は送られ、薬師如来の製作にいたったと考えられます。

なお、以前、授業で習った「大正１１年（1922）萩原町市街図」では、萩原には「県是製糸株式会社益田工場」と、「旭製糸株式会社」という２つの工場があったことを勉強しました。この萩原町がある益田地方で作られた糸は「益田糸」とよばれて、重宝されたそうです。

また、養蚕に関わる遺跡として、萩原の古関地区に「風穴」（下の写真参照）があります。ここでは、常時１０℃前後の冷たい空気が吹き出し、天然の冷蔵庫として利用されていました。大正末期ごろ、蚕の種をつくっていた４軒の蚕屋が石室を築いて蚕種（たなず）を保管し、春蚕・夏蚕・秋蚕にあわせて抑制した蚕種を販売していたそうです。

【古関にある風穴】

【風穴の中。夏でも涼しい。】

第６章　研究のまとめ

第１節　民話の分析から探る「山の世界」

１：「異界」としての山

昨年度、「益田川」に関する民話について地域研究を行った先輩たちは、川に関する民話の特徴として、人間と人間との物語よりも、人間と異形の者たちとが出会う話、あるいは日常では考えられない特殊な出来事が起きる話が多いとまとめています。今年度、私たちが調査した山に関する民話についても同じことがいえるのではないかと思います。私たちが研究した民話では、天狗（「天が岩の天狗」）や山姥（「穴岩の雨乞い」）といった伝説上の生き物、阿弥陀如来（「ほとけ山の由来」）や蚕薬師（「山之坊の蚕薬師」）といった仏様が登場しました。また、萩原町の山々に関する民話には、他にも大蛇（「帯が平の大蛇」）や狐（「お美津ギツネ」）なども登場します。

昔から、かなたの海原や奥山は非日常的な場であり、見知らぬ外部の世界でそこは神々の住むところとされ、神はそこから人びとの日常生活の場に来訪し、祟りや豊饒をもたらすと考えられたそうです。（倫理教科書〈数研出版〉『日本の風土と社会』）。今回の研究で山の現地調査を行ったとき、登山口から山に入る瞬間に、参加者のほとんどが「少しこわいな」という感覚を持ちました。私たちには、日常生活の場とは離れた「山の世界」を畏れる心があり、そうした心が民話に伝説上の生き物や仏様を登場させたのではないかと思います。

【学校の近くの諏訪神社。
拝殿には諏訪神社の神様とされる大蛇の模型が…】

２：「信仰の場」としての山

雨乞いのために穴岩まで登った野上地区の人びと（「穴岩の雨乞い」）の姿からは、「信仰の場」としての山の姿が浮かび上がってきます。萩原地域の人びとは、特に雨乞いの際に山の神に祈ることを熱心に行っていたようです。例えば、桜洞や萩原地区では、代表者が酒とさかなを持って御前山に登り、観音様にお経をあげます。そして、麓では県神社の横の観音堂に集まってお教をあげ、代表が帰ると一緒に酒盛りをしたそうです。また、山之口地区では位山峠の近くにある位山神社に一週間ほどこもり、お神酒を供えて祈願したそうです。

【県神社の観音堂】　　　　　　　　　　【「御前嶽」の文字が見える灯篭】

次に、山之坊で修行に励んだ人びとの話（「山之坊と蚕薬師」）からは、修験道（深い山で仏教の修行をすること）の場として、萩原の山々が利用されていたことも分かります。仏ヶ尾山で見つかった阿弥陀如来像を保管していた高橋さんのお宅に山伏が訪ねてきたという話も萩原地域の特徴をよく表しています。

また、現在でも、山は信仰の場とされています。お盆に先祖の霊を迎える迎え火や、先祖の霊を送る送り火は有名ですが、萩原でも毎年少し変わった「火」がともされます。今年は８月７日、８日に、萩原夏まつりが開かれましたが、それに合わせて楢尾山に先祖の霊を迎える「大文字のイルミネーション」が浮かびました。

【大文字イルミネーション】

【楢尾山に設置されたネットとランプ】

３：「生活の場」としての山

山で狩猟をしていた彦七（「ほとけ山の由来」）や蚕種を保管した風穴の例からすると、萩原の人びとにとって山は畏怖や信仰の対象だっただけではなく、「生活の場」として利用されていたことも分かります。飛騨は元禄５年（1692）に幕府直轄領となり、すべての山が御林山（幕府が直接管理する山林）となりました。しかし、領民の立ち入りが禁じられた御留山のほかは、主に薪炭（燃料）を生産する山林および建材などの材料を供給する雑木山や、農業用肥料および養蚕用の桑や焔硝製造の仕込材料を供給する草山として、里の人びとに利用されていました（参考資料：「幕領飛騨の御留山と植木場」）。萩原町の山々にも草山は多く、人びとは燃料や建材を求めて、山に入っていったと思います。そして、そうした作業中に不思議な出来事に遭遇したのではないでしょうか。

また、江戸時代の古地図を見ると山の中に様々な地名があることに気が付きます。谷や洞、尾根、峠などには細かく名前が付けられており、道筋や川筋もしっかりと書き込まれています。ここから私たちは今、「〇〇山」と漠然とよんでいますが、私たちの先祖にとって、山は単に「山」ではなかったことが分かります。その内部には、町の住所と同じようにしっかりした区分けがありました。そして、おそらくこうした区分けは、生活するために欠かせない資源を山から得ていて、山が萩原の人びとの生活圏の一部となっていたからだと考えられます。

【飛騨における草山の分布　参考資料：「幕領飛騨の御留山と植木場」】

４：巨石と民話

萩原の山に関わる民話を分析すると、巨石に関わるものが多いことが分かります。例えば、今回分析した雨乞いの「穴岩」や天狗の住む「天が岩」です。その他にも、山之口地区の六文字岩、羽根地区のおぶ石（下の写真）など、巨石に関わる民話はいくつも残されています。

日本史教科書（山川出版社）によると、縄文時代の人びとは、あらゆる自然物や自然現象に霊威が存在すると考え、これを「アニミズム」というそうです。また、古墳時代の人びとは、大きな岩に神が宿ると考えていたそうです。このような古代の信仰が、現在まで受け継がれ、巨石に不思議な力が宿っている、もしくは天狗などが住み着くと考えられたのではないかと思います。さらに、益田川の上流部に位置し、巨石が残りやすい萩原の地理的な環境もこうした民話を生み出す一因であったのではないかと考えます。

【羽根地区にある「おぶ石」】

第２節　「山のイメージ」の変化

授業で色々な資料を読んだり、現地調査や取材で「山の世界」に触れたりした後、「山のイメージ」についてもう一度、みんなで話し合ってみました。

・山は僕たちにとってすごく大切な存在だというイメージになりました。今でも山と人間はすごく関わっていて、生きるために必要な存在です。昔は雨乞いをして雨を降らせてもらうなど、人は山からたくさん恵みを受けて、たくさん感謝をしてきたのだなと思いました。この夏、実際に仏ヶ尾山に登ってみて、山の中は気持ちよかったし、動物もいる、そして、水もあって、資源が豊富で人間に必要不可欠だと実感しました。そして、穴岩からは僕たちの町が一望できて、なんだか穴岩は僕たちの町を見守ってくれているような、そして困ったときはもしかしたら手助けしてくれるような気がしました。

・山には、たくさんの民話があり、昔は雨を降らせるために登ったり、山姥が山にいるなんて話もあったり、興味のなかった山がとても魅力的に思えてきました。下から山を見てみると、大きな木を生やした土地が盛り上がっているだけというイメージしかありませんでした。しかし、実際に仏ヶ尾山に登って山の中で山を見ると、木一つ一つがきれいに見えたり、どこからこんな大きな岩が出てきたのだ！と思うくらいの大きい岩がたくさんあったり、木々のちょっとした隙間から外を覗き込むと、下にはきれいな風景がどーんと飛び込んできたり…。想像もしてなかった世界が広がっていました。本当に興味のなかった山が、授業を通して、すごく魅力的に見えてきました。普段から目にしている山も、この山には昔どんなことがあったのだろうと思ったり、もしかしたらこの山の中に、何かあるのではないかと疑問を持ったりすることもできるようになってきました。山のことをたくさん知ることで見える世界が広くなりました。

「山なんて何もない。」と思っていた私たちでしたが、身近にある萩原の山々には、私たちが知らない「山の世界」が広がっていることを知りました。本研究でまとめたことは、山とともに暮らしてきた私たちの祖先からすれば、こんな事も知らなかったのかと笑われることばかりでしょう。おそらく、私たちの親もこのような話は知らないと思います。だからこそ、「山の世界」を少しでも知った私たちが次の世代に伝えていくべきだし、山の近くに暮らしている私たちは、もっと山から学べることがあると思っています。これからは目の前にある山をもっとよく知ることで自分たちの地域を理解していきたいです。

なお、最後になりましたが、本研究をまとめることができたのは、取材に協力してくださった地域の方々や校内の先生方のおかげだと思っています。ありがとうございました。

【地域研究メンバー　萩原諏訪神社】

参考文献
・萩原のむかし話編集委員会『はぎわら文庫１　萩原のむかし話』1978 年
・はぎわら文庫編集委員会『はぎわら文庫６　萩原の風土と生きもの』1984 年
・萩原教育委員会『はぎわら文庫１２　萩原の民俗信仰と芸能』1990 年
・萩原教育委員会『はぎわら文庫１５　萩原の伝承めぐり』1993 年
・萩原町史編集室『萩原町史第一巻　自然・先史・古代・中世編』2002 年
・下呂市教育委員会『下呂市文化財調査報告書第６集　中呂村文書目録』2016 年
・高山陣屋管理事務所
「平成二十七年度高山陣屋特別展　幕領飛騨の御留山と植木場－江戸時代の育林・育樹」2016 年
・笹山晴生ほか『日本史Ｂ』2012 年
・片山洋之介ほか『倫理』2012 年
・益田清風高等学校『「地域研究」学習活動のまとめ（2015 年 4 月～2016 年 3 月）』2016 年

・本文中に掲載している写真はすべて卒業生を含む授業選択者が現地取材で撮影したものである。